

昭和初期日本犬の検討 獵犬、使役犬、番犬、愛玩犬

はじめに

昭和三〇一二年は、「日本犬」という存在が確立された時期に当たる。日本犬保存会の活動により、「日本犬」が探し出され、そうでない犬が排除され、犬種が定められ、天然記念物の指定にも成功した。また犬籍簿が整備され、ドッグショウがはじまり、飼育頭数も増加する。そのなかで日本犬が一般の人々にも認知されるようになっていくのである。

こうした過程について、これまで日本犬保存会の設立、天然記念物指定、狎や土佐犬といった他の日本の犬との関係から論じてきた⁽¹⁾。本稿では、日本犬保存会の方向性がほぼ固まりつつあった昭和一一年という時期を取り上げ、日本犬保存会による言説と一般犬界からの視点と比較し、他の犬種との関係を分析することで、日本犬の飼育が広まる流れを明らかにしたい。

本稿では、昭和一一年に日本犬保存会が作成した、一般の愛犬家対象の飼育入門書「昭和日本犬の検討」を中心に取り上げる。鏑木、

志村 真 幸

板垣、斎藤、平岩ら日本犬保存会関係者を総動員し、日本犬の歴史、健康管理、種類、飼育法などを網羅的にまとめたものであった。日本犬を守るには、なによりも飼育頭数を増やす必要があり、そのためにこうした出版物が企画されたのである。

たとえば、小松真一が担当した「日本犬の分類と名称」の章は、新しく日本犬を飼おうとする「○」が、犬に詳しい「×」にアドバイスを受けるという形式で日本犬を紹介している。会話形式で分かりやすい構成となっている。

○近頃大分日本犬が流行するね。

×ああ、往年のセキセイインコや十姉妹の二の舞ひを演じさうだよ。

○おれも一つ日本犬を飼つて見やうかと思つてゐるんだが、其の前に一つ日本犬の概念を得たいと思つて、今日は君の所へ聞きに来たんだよ……

×そんなら一つ聴かせるかな。今夜は少しアルコールの影響でヨタが混るかも知れんぜ⁽²⁾

以下、「×」は日本犬について丁寧に教えてくれる。現在のペット本の原型に当たるといえるものである。

これ以外には、板垣四郎「日本犬研究の将来」、鏑木外岐雄「天然記念物と日本犬」、高久兵四郎「日本犬の精神美」、京野兵右衛門「優秀日本犬の作出法」、三宅旭勝「使役犬としての日本犬」、加納光喜「日本犬の訓練」、寺岡環「日本犬の飼ひ方」などの記事が並んでいる。

日本犬の初心者に対して、どの犬種を選ぶべきか、どうすれば上手に飼えるのか教えてくれる本なのである。日本犬保存会は、その創設以来、日本犬を守り、飼育を広めていくためにさまざまな方策を採ってきた。そのなかで、日本犬を一般の人々に飼ってもらうための集大成が本書なのである。そこには日本犬保存会の戦略があらわれ、また当時の犬界における日本犬の位置づけが見え隠れしている。

同時に、一般犬界の視点として、『最新 犬の飼ひ方と訓練法』（日本愛犬倶楽部編、岡村書店、昭和九年）、高橋虎雄・益田甫「良犬を得る秘訣」（文化生活研究会、昭和四年）の二冊を扱うことにする。これらは洋犬、日本犬、他の日本の犬のすべてを扱った飼育書であり、日本犬を相対的に見ることできる資料となっている。昭和一一年よりも以前、日本犬保存会が試行錯誤している期間に出版されたものを選んだ。なお、本稿でいう洋犬はセッターやシェパードといった欧米産の犬、日本犬は秋田犬、甲斐犬、紀州犬、越の犬、四国犬、柴犬、北海道犬の七種、他の日本の犬は狎、土佐犬、日本テリアなど、日本犬保存会が日本犬とは認めなかった日本原産の犬を差す。

昭和九年に岡村書店から出た『最新 犬の飼ひ方と訓練法』は、日

本愛犬倶楽部によって編纂されたものである。日本愛犬倶楽部は、雑誌『犬の研究』の執筆陣が本書の出版のため結成した会であった。翌年には九版を数え、良く売れた本であった。

『良犬を得る秘訣』は、福永重勝・森本厚吉の文化生活研究会によって出版された「家庭科学大系」シリーズの一冊で、一般家庭への備え付けをうたい文句とした。高橋は『犬の研究』などを著した犬の研究者、益田は獣医の息子として診療所で働くうちに犬の専門家となった人物である。高橋の死後、福永から益田に連絡があり、高橋の遺稿と益田の書き下ろしを合わせて出版したのが『良犬を得る秘訣』であった。こちらも昭和七年に春陽堂から別版が出るなど、人気の本であった。

これらが、都市民を主たる対象とした本であったことは注意しておきたい。職業的猟師が猟犬を選ぶときに使うものではなく、一般の人たちが、遊猟用の猟犬、番犬、闘犬、愛玩犬を購入、飼育するに当たって参考とされた本なのである。

昭和一〇年前後から、日本犬の飼育頭数は劇的に増えていく。日本犬を選ぶということは、どういった意味を持ったのか、考えていきたい。

一 犬を買う

『最新 犬の飼ひ方と訓練法』には、さまざまな種類の犬の値段が出てくる。犬種、生後三ヶ月の価格、生後一ヶ年の価格を（表1）に

<表1> 「犬の価格」『最新 犬の飼ひ方と訓練法』より作成

犬種	生後三ヶ月	生後一ヶ年
グレイハウンド		200～700円
セントバーナード	200円～	700～1500円
シェパード	50円～	150～2000円
ブルドッグ	35円～	100～3000円
グレートデン	50円～	100～800円
スパニエル	40円～	100～1000円
ブルテリア	25円～	40～300円
フォックステリア	15円～	20～500円
セッター	15円～	35～1500円
ポインター	10円～	20～1500円
グリフォン	50円～	100～700円
エアデール	20円～	50～800円
レトリバーヴァー	30円～	50～500円
土佐犬	20円～	50～500円
秋田犬	15円～	30～300円
柴犬	30円～	50～300円
狎	20円～	30～300円

示した。

三ヶ月と一ヶ年の二つの価格帯があるのは、仔犬のときに売られるケースと、一年間の訓練を経てから引き渡されるケースの二種類があつたためである。現在では仔犬を購入するのが普通だが、当時は専門家の訓練を受けた上で売買されるものも多かつた⁽³⁾。特に猟犬は訓練が必須であり、それ以外にもシェパードは使役犬、土佐犬は闘犬の訓練を受けることがあつた。セッターやポインターといった猟犬が、三ヶ月ではごく安価なのに、一ヶ年では一五〇〇円もするものがあら

われ、また一方で二〇〇三五円と低額に留まるものが出るのは、この間に猟犬としての訓練が行われ、そのなかで優劣がハッキリするためであつた。シェパードや土佐犬も同様である。さらに、フォックステリアや狎など愛玩用に飼われた犬も、丈夫な成犬となり、体型、毛色、性質が安定した時点で値段に差が出た。流行、品評会の入賞歴などによつても左右され、「名犬といはれるものやその系統になると、三萬円、四萬円といふものさへある」⁽⁴⁾というほどであつた。

さて、このリストで注目したいのは、土佐犬、秋田犬、柴犬、狎という四種類の日本の犬が含まれている点である。このうち土佐犬と狎については、従来から畜犬商で売買されてきた。しかし、秋田犬や柴犬といった日本犬が商品リストに出ることはなかつた。明治三〇年代から、大日本猟犬商會や東京養犬場の広告を見ていっても、日本犬はまったく出てこない。

日本犬が畜犬商によつて扱われるようになるのは、昭和に入つてからのことであつた。それ以前は、斎藤弘が「大正一五年秋以来いろいろ優秀な日本犬を入手したいと奔走して居りました私は東京の畜犬商等を片端から歴訪しても、日本犬を手持ち居るもの一軒もなく」⁽⁵⁾と述べるとおりの状況であつた。大館などの産地で探すか、職猟師に分けてもらうしかなかつたのである。

もともと日本には犬を専門に扱う店はなく、明治初期、横浜在住のイギリス人が片手間に犬を繁殖・分譲したことで畜犬商が始まる。その後、日本人がドイツやイギリスから洋犬の輸入・繁殖を手がけるようになり、あるいは鳥屋で小鳥に混じつて売られることもあつた。や

がて明治三〇年に、田中友輔・浅六親子によって日本初の犬専門店である大日本猟犬商會が開かれる。そして昭和初期になって、一気に畜犬商が増加するのである。『良犬を得る秘訣』には、「近頃は畜犬趣味の流行に伴つて、犬を売買する所謂『犬屋』なる商売が其処此処に現れました。これはかなり以前からあつたものですが、近頃その数にはかに増したやうに思われます。従つてお金さえ出せば、どんな良種の犬でも至極簡単に手に入れる事ができるやうになりました」(6)と記されている。この時期に愛犬趣味が拡大したことで畜犬商が増加し、そのなかで日本犬も扱われるようになったのである。(表1)に見られるように、値段も洋犬と比べて見劣りするものではなかった。

日本犬を扱った畜犬商については、『昭和日本犬の検討』などの広告から数軒が拾い出せる。東京の千疋屋には、もともと洋犬を売る畜犬商があつたが、昭和五、六年頃に日本犬部門が併設される。経営者・中山徹は、日本犬保存協会という団体もつくっている。日本橋にあつた日本畜犬も、シエパードのほかに秋田犬を扱った。大阪には藤島畜犬部があつた。また地方へ目を向ければ、甲府に甲斐犬専門の米山豊三という畜犬商がいた。

これら日本犬を扱う畜犬商があらわれたことで、日本犬もお金を出して買うものとなつた。売られるためには、純血種である必要があつた。雑種はもらつてくるものであつて、畜犬商で売りものとなることはなかつたのである。

しかし、悪質な業者も少なくなかつた。『最新 犬の飼ひ方と訓練法』には、「犬屋の不徳義なものになると、系統書をこまかすばかりでなく、

犬そのものをさへ飛んでもない代物を掴ませることがあるから、よほど注意せねばならぬ。殊に、仔犬を買ふ場合には、素人は欺され易いものである。フォックステリアのつもりで買った仔犬が、日を経るに従つてだんだんをかきな形になり、似ても似つかぬ駄犬になつたりする。柴犬の仔を、シエパードだといつて買はされた人がある〔7〕。白色シエパードなどと勿体をつけて、ブルテリアを掴ませる奴がある。悪辣な犬屋になるとそれ位の嘘八百は平気でやりかねないから困つたものである」(8)、さらに「元来、犬屋で売る仔犬は、多くは他所から買つて来て売る仲買に過ぎないから、買ふ方では親がどんな犬か知ることが出来ないのです、犬屋の言葉を信用するより外にない。そして、仔犬はすべて可愛らしく、よく見えるもので、成長するに従つて、アラが見え駄犬は駄犬の本性を現して行く。その時になつて苦情を持ち込んでも、てんで相手にしないのが悪徳犬屋の常であるから、最初買ふときによほど注意しないと、後悔しても及ばないのである」(9)と。なかなかの悪質さである。純血種の価値が高まつた一方で、系統書等が未整備な点を悪用する畜犬商がいたことが分かる。昭和初期に洋犬と日本犬のいずれにおいても、愛犬団体が次々と結成され、血統管理を行うようになるのは、こうした状況を受けてのことであつた。また、この文章からは柴犬とシエパードの位置づけもうかがわれる。

高橋・益田の『良犬を得る秘訣』にも、「それでは一つ犬を飼ふことにしやう。と云ふので犬屋の店に馳つけるとします。そして目下の流行はシエパードだと聞かされて、かなり高価な犬を買つて参ります。ところが一ヶ月か二ヶ月もすると、だんだんと身体が痩せて来

て気力がなくなつて行く。どうもおかしいと思つてゐるうちに死なしてしまつた、など、云ふ事はさらにある悲劇なのであります」⁽⁹⁾とある。

では、きちんとした犬を買うにはどうすれば良いのか。「最新 犬の飼ひ方と訓練法」によれば「相当に犬の知識を其へた人はともかく、初心者を買ふ前に雑誌なり本なりで研究し、写真をも見て、ひと通りの予備知識を養つておくがよい。さもなければ犬に詳しい人に相談するが第一である」⁽¹⁰⁾、また「いつたいに、素人がいきなり犬屋から仔犬を買ふといふことは危険極まる。買ふならば、よほど定評のある、信用するに足る店を選ぶべきである。もつとも安全なのは、趣味として犬を飼つてゐる人から分譲して貰ふことである。それらは種犬や母犬の系統もハッキリ判るし、価格も比較的安いし、先ず安全といふべきである」⁽¹¹⁾という。すすめられてゐるのは、犬に詳しい人に相談すること、さらには「趣味として犬を飼つてゐる人」から分譲してもらうことなのである。悪質畜犬商がはびこることで、「最新 犬の飼ひ方と訓練法」などの入門書が必要となり、愛犬家の存在もクローズアップされていったのであった。

実際、趣味の愛犬家は盛んに犬の分譲を始めるようになる。「近頃のやうに犬が盛んに流行するやうになると、専門の職業として犬屋の増えることも夥しいが、これを副業としてやるにしても、相当の成績をあげることが出来る」⁽¹²⁾というのである。優秀な牡犬を持つていれば種付け料が、牝犬の場合には仔犬を売ることと利益が出た。「かういふ風にして、養犬を副業にしてゐる人が、近頃では全国的に非常

に多くなつた。仔犬の売り捌きは、新聞や雑誌に広告してもよいし、知友の紹介で直接に売つてもよいし、売れ残りは犬屋がいくらでも喜んで買ふ。優秀な仔犬ほど買手は降るほどある故、決して持ち腐れになる心配はない」⁽¹³⁾と書かれるほどだったのである。「良犬を得る秘訣」にも、「副業としての飼犬」の章が設けられ、「実際の愛犬家諸君が、その秘愛する犬の種を分ち合う方がどれ程安全で、どれ程愉快であるか知れません」⁽¹⁴⁾という。

まとめれば、昭和初期まで日本犬が畜犬商で扱われることはなかつた。その後、秋田犬や柴犬が店先に並ぶようになり、日本犬といえどお金を払つて購入するものという意識が生まれる。しかし、畜犬商の犬は怪しいものも多く、趣味の愛犬家から購入することがすすめられる。ここに日本犬保存会の活動が見事に適合したわけである。日本犬保存会は畜犬商として日本犬の売買を行うことはなかつた。しかし、別稿で論じたとおり、飼育希望者には仔犬を手配し、会員同士での繁殖や分譲も積極的に後押しすることで日本犬を広めていった⁽¹⁵⁾。信頼できる犬を安価でという、社会の要求にピタリ対応できたのである。血簿の整備、ドッグショウの開催といった活動も、畜犬商との対比、一般愛犬家の取り込みといった側面抜きには理解されないのがある。

強調しておきたいのは、昭和初期の日本犬が純血種の犬として登場したことである。明治以降、セッターやポインターといった「犬種」のある洋犬がもたらされたことで、純血種と雑種という概念が日本にも浸透する⁽¹⁶⁾。そして純血種を手に入れるには、近所で生まれた仔

犬を貰ってくるのとは違って、対価を払う必要があった。そしてお金を払う以上、ただ飼っているだけでは満足できず、犬には利益や目的を求められることになる。実際、この時代の飼育書では、獵犬、番犬、軍用犬、警察犬、闘犬など、どの犬にも何らかの実用的意味が持たされている。

これが日本犬にも適用されることになる。かつて日本の犬は町犬として放し飼いにされるのが普通であった。実用性を期待されるわけもなく、近所が共同で餌を与え、何となく犬が居着くという状況だった。しかし、町犬は明治三〇年代、畜犬税が導入されることよって姿を消してしまふ¹⁷⁾。そして昭和に入って再登場した「日本犬」は、純血種であり、お金を払って購入する犬になっていたのである。

洋犬によって純血種、実用性という概念が持ち込まれ、やがて血統管理や畜犬商といった構造的な部分も整備されていく。そこに日本犬があてはめられたのである。

では、日本犬にはどのような実用性があったのか。

二 品種と能力

ここでは、『昭和日本犬の検討』で示されている、日本犬の「目指すべき方向性」について、『最新 犬の飼ひ方と訓練法』、『良犬を得る秘訣』と対照させつつ、分析していきたい。

『昭和日本犬の検討』は、昭和一一年五月に犬の研究所（社主・白木正光）から出版された。同社は犬専門の出版社であり、出版広告を

見ると、「犬の参考書」として、村上耕三『犬の訓練を説く』、鶴見孝太郎『流行犬フオックステリア』、中島基熊『シエパード犬の飼ひ方』などが並べられている。日本犬保存会との関係を見れば、板垣四郎『日本犬の保存』、高久兵四郎『日本犬の飼ひ方』ほか、会員の著作も何冊あるが、どちらかといえばシエパードやエアデルといった洋犬に関する本が多い。また、首輪、ブラシなどの「畜犬具」、ヴィタカルク、カンチヨンなどの栄養剤、予防薬も扱っていた。

『昭和日本犬の検討』は、板垣四郎、鏑木外岐雄、斎藤弘、小松真一、高久兵四郎、京野兵右衛門、平岩米吉ら日本犬保存会の主だったメンバーが執筆している。犬種ごとの紹介は、秋田犬を京野、甲斐犬を小林承吉、紀州犬を石原謙が担当しており、各地の支部まで動員した企画であった。さらに子母澤寛、長谷川伸ら著名な会員から「日本犬隨筆」が寄せられており、まさに総力を挙げての出版であったことが分かる。

扉頁の「巻頭言」には、「祖国の犬である日本犬が、日本の犬界の王座につくのは当然のことであり、又かくあらねばならぬ」¹⁸⁾と勇ましい言葉が掲げられ、以下、日本犬の素晴らしさ、飼うことのメリットが説かれていく。

冒頭に配されているのは、昭和一〇年度の理事長であった板垣四郎の「日本犬研究の将来」である。ここでは日本犬を一般に広く飼ってもらうための方策が提案される。日本犬保存会の発足以降、日本犬の「飼ひ方」はさまざまに試されてきた。獵犬がいいのか、使役犬に向くのか、番犬にすべきなのか。その試行錯誤をたどりつつ、最終的な

方向性を示す文章となつてゐる。そこには同時に、日本犬の抱える苦悩や困難も滲み出ている。

板垣は、「近年日本犬熱の台頭は、実に目覚ましいものがあり、本邦犬界の花形となつた観がある。その起淵する所は多々あらうがこれには日本犬保存会々員及び日本犬愛好者各位の有志の大活躍を見逃す訳にはゆくまい。一時は殆ど我が国土から影を失はんとした和犬が、近年を出でずして、猛然大界の第一人者とならうとは、誰が予期した事であらう。かくして日本犬保存会の使命の一部は遂げられた」⁽¹⁹⁾と語りはじめ。確かに、絶滅の危機に瀕する日本犬を救うという当初の目的は達成された。しかし、犬界の第一人者とまで述べるのは、さすがに誇張であらう。当時、もっとも人気があつたのはシェパードで、飼育頭数も比較にならなかつた。斎藤ですら「洋犬萬能の絶頂期」⁽²⁰⁾と評している。日本犬はまだまだマイナーな犬だったのである。この板垣の例に限らず、日本犬保存会の言説にあらわれているほど日本犬が大流行していたわけではないことには、注意しなくてはならない。以下、見ていくように、あくまでも当時の犬界の主流は洋犬であり、日本犬はそこに切り込んでいく必要があつた。

自信満々にはじめた板垣も、すぐに不安をのぞかせる。「次に吾々ほどの方面に日本犬を導いて行くべきか、将来日本犬を如何に研究すべきか、直面する問題の一つであらねばならない。何事によらず、物には流行がある。所謂流行の尖端に活躍することは、誠に愉快なことであり、且つ興味の深いことである。しかし冷静に、而かも真面目に熟慮すれば、この流行こそ、引続き招来する衰微への前提で、而か

も急劇な發展廢れは早いものである」⁽²¹⁾として、危惧を表明するのである。前述の小松と同様、明治期に流行した養兔の失敗、また近年ではセキセイインコや十姉妹、食用蛙、食用鳩がたちまち廢れてしまったことに触れ、「吾々は犬界の熱狂、殊に最近数年に於ける日本犬萬能を見るにつけ、それ等の轍を踏むのではないか、と疑はざるを得ない。一難去つて又一難来るの感じがするのである。この憂慮は或はあまりに心配し過ぎる点があるかも知れないが、轉ばぬ先の杖こそ必要なことであらう。犬界現時の熱狂をその儘統けて、後顧の憂ひなからしめる方法として、たゞ徒に流行に走らず、何等かの目的を附帶し、茲に有力なる意義を存せしむることが緊要である」⁽²²⁾と述べる。

さらに「犬界の寵兒たる日本犬飼育が、将来どんなに進展するかは、日本犬の使命を發揮し、研究、指導の適否によつて、決定される問題ではなからうか。換言すれば、日本犬の有する能力を充分發揮する方法を講ずることが、緊要な任務である。翻つて、従来に於ける日本犬の用途を顧みるに、一部は獸鳥獵に、一部は番用とされたに止まつてある」⁽²³⁾とつづける。現在では一部が獵犬や番犬として飼われていただけなので、もっと用途を開発すべきだといふのである。すなわち、日本犬を飼うことに「何等かの目的を附帶し、茲に有力なる意義を存せしむる」ことが求められている。

では、どのような犬なら廢れないのか。

板垣は、「古くから我国に輸入された外国犬種について見るに、多少の流行はあつたにしても、現在或は将来、恐らくは永久に廢りなしと思はれるのはポインターやセターであるが、その理由はこれ等が獵

犬としての使命を保有するからで、獵技の廃らぬ以上、獵犬の生命は益々熾んになるであらう⁽²⁴⁾とする。まず挙げられるのは獵犬としての利用なのである。

では、日本犬は優秀な獵犬だったのか。

板垣は、「猪、鹿、或は熊獵には、日本犬以外に適種犬なしとまで極言された」⁽²⁵⁾というが、現実には日本犬の獵犬としての評価は決して高くなかった。「最新 犬の飼ひ方と訓練法」の「獵犬」の項目には、ポインター、セッター、グレイハウンド、ディアハウンド……と二三種が並べられているが、日本犬はまったく出てこない。別項の「日本犬」に、狎、土佐犬、秋田犬、柴犬が取り上げられているが、獵犬としての使用には一言も触れられていない。『良犬を得る秘訣』の「獵犬」の項目には、イングリッシュ・セッター、イングリッシュ・ポインター、グレイハウンド……と四二種が取り上げられているが、日本犬は見られず、「非獵用犬」のなかに、秋田犬（番犬）、土佐犬（番犬）、樺太犬（引用犬）、狎（愛犬玩種）が出ている。一般には、日本の犬は獵犬とは見なされていなかったのである。実際、日本犬を獵犬とするのは職獵師のみであり、遊獵者は洋犬を使うのが普通だった。板垣はすぐに、獵犬という提案を引っ込めてしまふ。「しかしながらこれ等獸鳥獵のみが日本犬の生命であらうか。この目的にのみ日本犬を飼育するとすれば、あまりにも淋しい感じがする。あの鋭敏な嗅覚、あの頑強な体質、あの不撓の勇氣、これ等の特性を応用して、更に実用犬の作出に努力すべきではなからうか」⁽²⁶⁾と手の平を返したようなことをいうのである。言葉の上では日本犬を褒めているが、実

質的には獵犬としての未来を諦めている。

次に板垣が目指すのは何か。

「同好者は進んで、軍用犬に、警察犬に、訓練の歩を進めねばならない」⁽²⁷⁾。今度は軍犬、警察犬である。軍用、警察用への犬の使用は、日本でも大正期から試みられた。しかし、そこで使われたのはシェパードがほとんどであり、日本犬保存会も日本犬を採用してもらおうべく、訓練所を設置したり、国会への請願を行ったりするが、成功することはない⁽²⁸⁾。

日本犬が軍犬などの使役犬としても劣ることは、『昭和日本犬の検討』のなかでも、みずから認められている。三宅旭勝が執筆した「使役犬としての日本犬」で、軍犬としての適性が論じられているのだが、日本軍で軍犬適種犬と認定されているシェパード、エアデル、ドールマンと日本犬を比較し、否定的な評価を下す。日本人が従来から「犬の利用と云ふ様な方面は極めて無関心で、只一部分の犬が獸獵に使はれた位で、大多数は無用の長物と見られて、智能を啓発して人間の有用物となすと云ふ様な方面の事は、全く閑却されて居たので、素質が如何に立派でも機会を与へず、全く埋木として今日に至つたのである」⁽²⁹⁾と日本犬が役に立たないことを認め、さらに、「今迄放任してあつた日本犬を、直ちに理想的使役犬なりとは言はれない。故に此れを軍部で認めて居る軍用適種犬と比較して、優劣を論ずるのは無理である」⁽³⁰⁾とすら述べている。

そして、「世の日本犬愛好家諸君、徒らに未だ実力の備はらざる日本犬を無暗に誇張の宣伝をなして、反つて世の誤りたる批判を招くよ

りは、先ず実力ある使役犬を現実に作出して、その実力を示して社会に問ふならば、必ず求めずとも軍用犬警察犬等の、総ゆる智能的作業犬として採用される日の来るは、火を見るより明にして、敢て同好の士の御奮闘を望む次第である」⁽²⁾と締めくくられている。将来性は期待されているものの、現状では、使役犬としての利用も見込めないのである。

こうした見方は、『最新 犬の飼ひ方と訓練法』や『良犬を得る秘訣』にも共通する。前者で「軍用犬と警察犬」に挙げられるのは、シェパード、ドーベルマン、エアデール、コリー、グレートデン、ダルメシアン、ブルドッグ、セント・バーナードであり、後者の「警察及軍用犬」でも、シェパード、エアデール、ブラッドハウンド、ファウンドランドが示されるのみなのである。

板垣も結局のところ、「さりとて、使役犬が将来日本犬の進むべき唯一の目的であるとは云へない。大型及び小型の日本犬は、これ等の用途に不適當であり、寧ろ番犬とし、愛玩犬としての将来がある。日本犬総体の員数から見れば、小型犬が最多を占めること、思ふが、その小型犬の生命が、愛玩にありと仮定すれば、広い意味の日本犬の将来は、愛玩であるかも知れない。私は日本犬将来の研究として、決して愛玩を見逃してはならぬと高唱するものである」⁽³⁾というしかない。最後に残されたのは、番犬・愛玩犬という道だったのである。

現実に、日本犬の用途は限られていた。猟犬としてはある程度の数が使われるが、軍犬や警察犬への挑戦は壊滅的結果に終わった。板垣の言葉も、それを受けたものであった。では、番犬・愛玩犬としては

成功できたのか。

三 日本犬を飼つた人々

昭和一〇年前後から、日本犬の飼育頭数は大きく増加する。わずかな数で始まった日本犬保存会の会員も、昭和一年には七〇四名を数えるようになり、さらに昭和一二年には新入会員が二三名、昭和一三年には三八八名、昭和一四年には三二八名、昭和一五年には四七一名と、毎年、数百名ずつ増えていくのである。日本犬の人気の源はどこにあったのか。

『最新 犬の飼ひ方と訓練法』には、日本犬を愛玩犬として評価した箇所がある。「最近しきりにもはやされてゐる柴犬も、可愛らしくて非常に利口であり、主人に忠実であつて、愛玩に適してゐる」⁽⁴⁾、また「この犬は一代一主人といはれ、決して二君に仕えない。だから成犬を買つてもすぐに逃げかへるので、生れ立ての仔犬から育てなければ駄目である。従つて、一旦飼はれた主人に対しては甚だ忠実で、近來日本犬の流行種となつてゐるのは此為である」⁽⁵⁾という。愛玩犬として一定の評価を受け、流行していたことが分かる。ただし、『最新 犬の飼ひ方と訓練法』で愛玩犬に最適とされるのはフォックステリアであり、さらに柴犬より狆の評価が高い点は注記しておきたい。実際、番犬・愛玩犬の分野でも、ライバルが多いという状況は変わらなかった。『最新 犬の飼ひ方と訓練法』では、「番犬」としてマチチフ、グレートデン、ダルメシアン……など一七種が挙げられる。「愛

「玩犬」には、プードル、ポメラニアン、スキップパーキ…など一七種が出ている。『良犬を得る秘訣』では、「番犬」としてブルドッグ、ブルテリア、ボストン・テリア、チャウチャウ、秋田犬、土佐犬が並べられている。「愛玩犬種³⁶⁾」には、ポメラニアン、スキップパーキ、ペキニーズ、ジャパニーズ・スパニエル(狎) …と二三種が数えられる。秋田犬が挙げられているのは、日本犬党には嬉しい点だろう。

そもそも番犬・愛玩犬とは何か。『良犬を得る秘訣』には、「愛玩犬即玩具犬とお思ひになつてはいけません。此処に愛玩犬として選ばましたのは、決して何も実用にならぬからと云ふわけではなく、如何なる犬でありましても、飼主の家を守ると云ふ特質は必ず持つてゐるのであります³⁶⁾」と書かれている。愛玩犬についての一文だが、同時に番犬の説明にもなっている。ここから読み取れるのは、実用にならない犬でも番犬・愛玩犬にならなければならないことである。ただし、そこには何らかの魅力がなければならぬ。あるいは危険・超大型などマイナス点が高ければ不資格となる。また、その「魅力」は時代性にも左右される。では、純血の日本犬の持つ魅力は、どこにあったのか。もちろん、日本犬保存会による宣伝活動、血簿の整備、天然記念物指定なども有効であつたろう。しかし、本稿では実際に日本犬を飼育した人たちについて見ていきたい。具体的には、『昭和日本犬の検討』に収められた「日本犬を飼つた動機」を分析する。これは日本犬保存会の会員にアンケートを採つたもの³⁷⁾で、板垣四郎、猪野毛利栄らの中心メンバーから一般会員まで、三一人から回答が寄せられている。『昭和日本犬の検討』の一八、七二、九五、一二二頁に分載されたもの

を、(表2)にまとめた。

これは当時の日本犬保存会の会員が、なぜ日本犬を飼育したのかを示す。もちろん、これらの回答が編集の際に取捨選択された可能性もある。しかし、そこで選択が行われたとすれば、なおさら日本犬保存会の方向性が読み取れることになる。

もっとも多いのは、幼少時、あるいはかつて飼つていたからという回答である(以下、重複あり)。二・藤原、六・都賀田、七・尾崎、一〇・木下、一八・吉田、二〇・秦、二三・今村、二五・猪野毛、二六・大場、二七・寺岡、二九・中島、三一・追田と二人にのぼる。二四・鍋木もここに入れられるだろう。

つづいて、洋犬よりも日本犬の方が優秀なためというのがある。四・相馬、一八・吉田、一九・久保田、二二・高木が該当し、単に日本犬の優秀さを理由として挙げる、一七・鳥海、二〇・秦も見られる。類似的な回答に、三・幸松、一四・長谷川、一六・円山の、日本人なのだから日本犬を飼うべきだとの回答もある。

また、日本犬の危機を救うためという、一の板垣、三の幸松がある。そのほか、日本犬保存会や会員の宣伝や勧誘によるものが、八・坂井、一九・久保田。猟犬として飼つた例が、一〇・木下。流行しているからというのも、二・藤原、一八・吉田、三〇・八重田とある。

それでは分析に入りたい。まず、猟犬や使役犬としての実用性を挙げたものが少ない点に注目したい。一〇・木下が猟犬としての優秀さを述べるほかは、日本犬を飼うことによる具体的なメリットが出てこないものである。日本犬が優秀だからとの言葉は頻出するが、では、ど

＜表2＞「日本犬を飼った動機」『昭和日本犬の検討』より作成

1. 板垣四郎：日本犬保存の必要を感じたため。
2. 蔵原伸二郎：幼少の頃から好きだったからだが、長じて日本犬が飼ひたくても居ないので、弱つてゐたところ最近流行り出したので、飼ふ氣になつた。
3. 幸松春浦：亡び行く日本犬、一人にても愛犬人として、国犬の保存に当るは、意義あるによる。
4. 相馬愛蔵：此頃シエパードを大騒ぎして、毎年犬代金幾十萬圓に独逸に取らるゝを見て、遺憾に堪へず、我日本にも従来相当優秀の犬ありし故、これを保護改良せば宜しからんとの思ひ付きより急に日本犬を飼ひ始めました。
5. 小野賢一郎：高野山金剛峯寺の門前に一びきの犬を見てより。
6. 都賀田勇馬：子供の時分八犬伝を読んでから、妙に日本犬（地犬）を飼ひ出して、今日に至るまでかゝしたことがない。
7. 尾崎益三：昔は時分の家では日本犬だつたのですが、最近は何種のものも飼つてゐます。数年前、途中で日本犬に會ひ、その犬を手に入れて以来、山の中の村々で、和犬探しをしてゐます。
8. 坂井競：間接には両親の感化もあり、斎藤弘先生の主婦之友誌上の記事、アサヒグラフ、読売新聞の記事や写真等による。以前から山を探したり、人に頼んだりしたが、適当な日本犬が見当らずにゐた所、計らずも犬友久米氏より名犬白号を送られたので、これが動機になつたもの。
9. 貝藤忍：数年前、倅が拳闘練習中、外傷性の肋膜炎を患ひ、恢復後野外運動奨励のため。
10. 木下豊次郎：まだ青二才の時代でしたが、三河の奥のダンドの山に猪狩に行き、土地の獵師と其所の猪犬と共に幾日かを出で暮した時、獸獵犬としての日本犬を飼ふ氣になりました。
11. 蘆原覚了：好きですから求めました。
12. 墨国太郎：美濃柴犬は郷土自慢ばかりではない、あの小軀の全貌に鮮かなるローカル・カラーを發揮してゐる。そこに他の侵すべからざるものがあり、嗜好が集中した。
13. 小林承吉：甲斐犬愛護会創設の時、会員及び会員の家族と大挙して、南アルプス山麓、蘆安村に探査に行きし折、蘆安村随一の名犬虎号（中虎毛、五貫五百匁、牝）を入手、今も愛育してゐるが、最初の甲斐犬である。（以上、一八頁）
14. 長谷川伸：日本のモノと云ふ考へ方がいつの頃からか出てゐました故に。
15. 麻生徳次：犬を飼ひ度いといふのが、子供時分からの念願でありました。
16. 円山仁拳：日本人はよろしく日本犬を飼育せよと云ふモットーのもとに。
17. 島海英吉：日本犬的な性能から見ても鑑賞的な角度から見ても、秋田犬にも劣らぬと、古来より云ひ伝へられて居る郷土の高安犬の存在の為の念願より。
18. 吉田亀龍：私の子供時代は（四十余年前）洋犬（カメ）二割、日本犬八割にて、時々犬道にて嘯み合ひするも、日本犬には逆も洋犬は敵でなく、十六歳にて東京へ出て引き続き商売上、奥羽六県へ毎月織物行商の傍、よき地犬を数頭ず、連れ来るも、都会地にては育ち悪く、且つ可愛らしき為めに遂に他人に拾ひ取られ、数十頭まで我慢して飼育せし思ふ様に參らず、不止得爾来ブルドック三四十頭自宅にて飼育中、例の大震災の為め失ひしより一時中止せしも、数年前に農場を開く事となりて、再び各地より日本犬を取り集め、愛育中偶然にも此の兩三年前よりの急流行と相成り、一驚と共に吾れ吾れ和犬党には無上の愉快に候。
19. 久保田珍彦：私は子供時代より人一倍犬が好きで、色々の犬を飼育しましたが、いづれの種類の犬でも日本犬程の愛情なく、犬の性質の認識力が強くなると共に、日本犬の優秀性と、且つ放任して置くと、滅亡して遂に日本犬の姿を見ることが出来ぬことを憂ひ、深く決意して、保存繁殖を志し、日本犬界の大御所斎藤弘先生を保存会設立前に訪れ、先生の大理想と祖国愛の燃ゆるが如き御風格に愈よ励まされて、日本犬飼育の年を強めました。（以上、七二頁）
20. 秦一郎：幼時、偶然入手した小犬が居間から思へば体型、性質共に卓れ、見るからにキリリとした左巻の柴犬型日本犬であつたといふまでです。そして私はこの偶然の必然を飽くまで意味深く見凝めたいのです。
21. 新開俊一：銃獵の為め洋犬漁りの後、和犬に戻る。
22. 高木政雄：祖父以来の飼育に依ると共に十年以前其血統を失ひ流行の洋犬三種十八頭を飼育すること四カ年に及びしも體質の弱さと美食にして大食のみならず精神的にも日本犬の如く、たはれて後止むの奮闘的精神なく、且又他人に買取さるゝにあきたらず二度日本犬を想ひ山村より漸く求めて今日に及び荒木大將、陸相当時、農村問題の為め上京陳情の折にも軍用犬として、国犬推奨をしたものであります。（以上、九五頁）
23. 今村力三郎：僕の少年時代から僕の生家では日本犬を飼つて居ますので動機として申上ることもありません。
24. 鑄木外岐雄：幼少の頃飼つたことはあるが、今は愛犬家諸氏の犬を眺めて微笑むのみ。
25. 猪野毛利栄：郷里福井県大野郡の我家の犬が、今尚ほ懐かしくて、今は日本犬ばかり飼つてゐる。
26. 大場彌平：このやうなのが好きで、私は幼少の、今から四十年も前から飼つてゐました。殊に日露戦争後、旭川にゐるときまで、一時、三、四匹も飼つたことがあります。四十四年ふと青森のステーション前で見たマタギ犬が、どうしても欲しくてならず、汽車の出る少しの時間を飼主と談判して買ふたこともありました。この犬の原始的な絵身ゴマ斑胴は切れ上り、耳は小さくしまり、尾はぐりと小さく固く巻いた姿態は、今日でも想出深いのです。
27. 寺岡環：日本犬を飼つた動機はなし、物心付いた時から日本犬と共に成長した小生に取つては、此の世に生れ出た事が即ち動機と云へませうか。
28. 子母澤寛：街の行きずりに、ふと小型の日本犬を見ましたのが病みつきです。
29. 中島基能：四歳の時母より与へられた純黒の名犬で小学校を卒業するまで、日夜私の弟であつた。
30. 八重田健順：私は日本犬の前に、英ポインターを飼育して居ました。併しだんだんすたつて来たので次に流行するものは日本犬だとの見込みで飼ひ始めた。
31. 迫田如風：卅余年前、小学生の頃悪童の筆頭であつた私に八ヶ間敷屋の校長が、物好も皮肉、犬の仔をやるから持つて行つて飼へと言つて呉れたのが元〔。〕（以上、一二二頁）

が優れているのかという事例は上がってこない。すなわち、日本犬を飼った人々は、実用性を求めてはいなかったといえる。

では、なぜ日本犬は飼われたのか。

もっとも多い回答は、追憶・郷愁・愛着を理由に挙げるものであった。これは実用性とは程遠いところにある。しかし、単純に考えてはならない。まず、回答者たちがかつて飼っていた犬は、おそらく純粋な日本犬ではないであろうと思われる。日本犬保存会が「日本犬」とした犬は、在来種の獵犬であり、明治以前から数が少なかった。また一般の家庭で飼育されたとは考えにくい。回答者たちが飼っていたのは、町犬の可能性が高いのである。ところが、町犬も明治三〇年代には激減してしまい、在来種の空白期間が数十年間にわたってつづくことになる。これが昭和初期、純血種の日本犬として「復活」する。このことが日本犬ブームを引き起こしたものと考えられる。いったん見かけなくなつたことで価値が高まつたのである。もうひとつ付け加えておくならば、田舎や過去への郷愁は都会的な心性であるともいえる。これは会員の多くが都市民という、日本犬保存会の帯びた性格と合致している⁽³⁸⁾。

この追憶にプラスされたのが日本という要素である。当時の社会情勢において、「日本」であることの意義は大きかった。ここでは詳述しないが、日本犬への愛に愛国心が重ねられていくのである⁽³⁹⁾。〈表2〉からは、以前は洋犬を飼っていたものが日本犬に乗り換えた、あるいは日本犬をも飼うようになったケースが、七・尾崎、一八・吉田、一九・久保田、二一・新開、二二・高木、三〇・八重田と六例あるの

が読み取れる。愛犬家のなかで、洋犬から日本犬への変化が始まっていたのである。洋犬を通して犬を飼うことを覚え、やがて日本犬へ向かうという構図があつたのかも知れない。洋犬のデメリットが挙げられていた点も興味深い。一方で、新たに犬を飼いはじめたというケースも少なくない。日本犬が広まることで、新規の愛犬家が開拓されたと見ることができらるだろう。

日本犬保存会が「日本犬」という区分を設定したのは重要であつた。もともと秋田犬や柴犬といった個別の犬種・種名があつたにもかかわらず、それらを包括するものとして新たに「日本犬」というグループがつくられたのである。このような例は他の犬にはない。セッターとポインターをまとめてイギリス犬と呼んだりはしないのである。なおかつ、日本犬からは土佐犬や狎犬が外された。

実際、〈表2〉では一九人が日本犬という表現を使っている。個別の種名では、美濃柴犬（一二・墨）、甲斐犬（一三・小林）、高安犬（一七・鳥海）が一例ずつ見られるが、鳥海は秋田犬や高安犬を日本犬の下位区分として使い、秦も「柴犬型日本犬」と呼んでいる。飼われたのは、「日本犬」だったのである。

以上から、日本犬保存会が狎、土佐犬、日本テリアなどの「日本の犬」を激しく排斥したことについても理解される。日本犬を広めるには、「日本」という要素が不可欠であり、競合する犬種は排除されなければならなかつた。そのために高久兵四郎の「日本犬と云ふは：狎とか或は土佐犬を含まぬのである」⁽⁴⁰⁾といった言説が繰り返えされることになる。なかでも狎は最大のライバルと目され、斎藤弘らが躍

起になって外国起源の犬であることを証明しようとしていく⁽⁴⁾。

日本犬が番犬・愛玩犬として選ばれたのは、それが郷愁と結びついた「日本」犬として位置づけられたからであった。実用性などではなく、身にまとう記憶とイメージが魅力となったのである。

おわりに

かつて日本犬はお金を出して買うものではなかった。しかし、大正末から昭和初期にかけて再評価が起こり、秋田犬や柴犬などの品種が確立される。同時に畜犬商で売買されるようになるのだが、偽物や質の悪い犬も多く、これに対抗して日本犬保存会が純血の日本犬の供給元となっていく。

しかし、犬界における主流は依然として洋犬のままであり、日本犬を広めるため、日本犬保存会はさまざまな方法を模索する必要があった。ところが日本犬は、これといった実用的価値のない犬であった。猟犬としてはセッターやポインターに劣り、軍用犬や警察犬としてはシェパードにかなわないため、やがて番犬や愛玩犬への道が主流となっていく。

ここでも洋犬や狎がライバルとなったが、日本犬の飼育頭数は順調に伸び、日本犬保存会の会員も増加する。日本犬飼育が広まったのは、かつて飼った犬への郷愁、また「日本」犬である点が重視されたためであった。日本犬保存会の戦略と、時代性が噛み合ったことで、日本犬は成功することができたのであった。

注

- (1) 志村真幸『愛犬趣味の誕生』博士學位論文、二〇〇八年。
 - (2) 『昭和日本犬の検討』犬の研究社、一九三六年、一二頁。
- 以下、引用における「…」は中略、「□」は補足を示す。

- (3) 日本で洋犬の売買が始まった明治三〇年代には、生後三ヶ年半で売られるものもつとも高価であった。これも猟犬としての訓練を経たものである。その後、訓練技術の発達、飼い方の変化などによって、次第に訓練期間が短縮、また仔犬のうちに取り引きされるものが増えたようである。

なお、昭和初期の猟犬や闘犬の実用期間は次のようであった。「闘犬などは、三歳から五歳までが全盛期であつて、それから漸次下り坂となり、八歳位までで闘犬としての生命は終る。猟犬も、時としては十一二年も引続き活動する犬があるが、普通には先づ十年以内とみてよい」『最新 犬の飼ひ方と訓練法』日本愛犬倶楽部編、岡村書店、一九三四年、四〇頁。

- (4) 同、四四頁。
- (5) 斎藤弘『日本犬保存史』『昭和日本犬の検討』九頁。
- (6) 高橋虎雄・益田甫『良犬を得る秘訣』文化生活研究会、一九二九年、一三頁。
- (7) 『最新 犬の飼ひ方と訓練法』三六頁。
- (8) 同、三七頁。
- (9) 高橋・益田、前掲、五頁。
- (10) 『最新 犬の飼ひ方と訓練法』三六―三七頁。
- (11) 同、三八頁。
- (12) 同、八一頁。
- (13) 同、八三頁。

- (14) 高橋・益田、前掲、二〇五頁。
- (15) 志村、前掲、七二頁。
- (16) 犬については、江戸以前から血統管理が行われていた。ただし、明治初期までは犬を犬とは別の動物と見なす傾向が強かった。明治半ばになつてようやく犬も犬の一種とされるようになる。
- (17) 志村、前掲、六〇二五頁。
- (18) 『昭和日本犬の検討』一頁。
- (19) 板垣四郎「日本犬研究の将来」『昭和日本犬の検討』二頁。
- (20) 斎藤弘「日本犬保存史」『昭和日本犬の検討』一〇頁。
- (21) 板垣、前掲、二頁。
- (22) 同、二頁。
- (23) 同、三頁。
- (24) 同、二頁。
- (25) 同、三頁。
- (26) 同、三頁。
- (27) 同、三頁。
- (28) 志村、前掲、一一五〜一一七頁。
- (29) 三宅旭勝「使役犬としての日本犬」『昭和日本犬の検討』三一頁。
- (30) 同、三三頁。
- (31) 同、三三頁。
- (32) 板垣、前掲、三頁。
- (33) 『最新 犬の飼ひ方と訓練法』八六頁。
- (34) 同、二〇〜二二頁。
- (35) 原文では「愛犬玩種」となっているが、誤植と思われる。
- (36) 高橋・益田、前掲、一八一頁。
- (37) なお、「日本犬は何故好きか」、「日本犬の思ひ出」の二題が併録されている。
- (38) 志村、前掲、八〇頁。
- (39) 同、一一五〜一二二頁。
- (40) 高久兵四郎『日本犬の飼ひ方』春陽堂、一九三三年、一頁。
- (41) 志村、前掲、九七〜一〇三頁。